【研究ノート】

曖昧な「ちょっと…」は丁寧か？

── 言わないことと聞き手の負荷をめぐって ──

マスデン眞理子

要　旨

「ちょっと…」はソフトで手軽な断りとして日常で頻繁に使われている。しかし、「ちょっと…」は敬遠を意味することもあるため、相手や場面のわきまえなく「ちょっと…」を多用すると否定的な印象を与えかねない。

本稿では、まず諸刃の剣である「ちょっと…」が日本語初級テキストでどのように教えられているかを見ながら、安易な導入の危険性を指摘する。次に、話し手の発話責任と聞き手の負荷という視点から、「ちょっと…」が発話責任を回避することにも触れ、「思いやりの『ちょっと…』」と「逃げの『ちょっと…』」の上手な使い分けを提案する。

1. はじめに

留学生から、「日本人の曖昧な言い方が苦手だ」という話を聞くことがあるが、曖昧な表現を好ましく思わないのは留学生だけだろうか。筆者の担当する教養科目の日本人学生に、「留学生を飲みに誘って、『ちょっと用事があって…。ごめんね』と断られたら、どんな気持ちか」と尋ねてみたところ、「せっかく誘っているのに、明確な理由や代案もなく曖昧に断られると、遠ざけられたと感じる」という否定的なコメントが多かった（マスデン、2011）。

初級日本語テキストでは、「ちょっと…」の断りを導入しているものが多い。日本語学習者が「だめです。」「できません。」「今日は飲みたくありません。」などの不躾な断りを言わないようにという配慮であろう。確かに、「ちょっと…」は断りにソフトな意味合いを付加し、丁寧な感じを与える。

だが一方、理由を率直に言わないため相手との距離を置くことになり、言われた側は「遠ざけられた」と不快と感じることもある。すなわち、「ちょっと…」は手軽にソフトな断りができる一方で、敬遠の意図も含む諸刃の剣である。敬遠の意味合いで使われることにも注意を向けないと、対人関係を損なう危険すら孕んでいる。

本稿では、まず「ちょっと…」が日本語初級テキスト（6冊）でどのように教えられているのかを見る。次に、話し手の発話責任と聞き手の負荷という視点から、「ちょっと…」の用法を分析する。

2. 初級日本語テキストでの「ちょっと…」

外国人のはっきりした断りが、キツイと感じられることがある。例えば、一緒に寿司でも食べに行こうと誘って、「いいえ、行きたくありません」や「寿司は好きじゃありません。」と言われたら不愉快だろう。

日本語教師の多くはこのような事例を数多く目の当たりにしているはずだ。外国人が対人関係での摩擦を防止するため、いわば「転ばぬ先の杖」として「ちょっと…」のような曖昧でソフトな断り表現を、初級日本語の段階で導入したものと推察する。以下に、代表的な初級日本語テキスト（6冊）において、断りの「ちょっと…」がどう扱われているかを、教科書の出版年の古い順に見てみよう。

2－1　“BASIC FUNCTIONAL JAPANESE”（1987年）

「あした3時に来てくれませんか」という依頼に対し、「3時はちょっと…。」と断る例を出し、厄介なことを断る場合は「ちょっと…」を使えばよい（Troublesome factor *wa chotto...*）と説明している[1]。

同書では「たばこを吸ってもいいですか」と聞かれて、「ちょっと…。」とソフトに断る表現を提示しているが、これは日本語学習者が「吸ってはいけません。」という失礼な言い方をしないよう、「〇〇はちょっと…。」を教えているのであろう。

同書は、便利な「ちょっと…」を積極的に紹介しているが、日本語学習者がこれを多用すると、対人関係に支障をきたすこともある。友だちに自転車を貸してくれと言われて、「ちょっと…。」とだけ断わったら、言われた側はそれを丁寧だと思うだろうか。「ちょっと…。」の言いさしで済ませず、「ごめん、今から自転車でバイト先に行かなくちゃいけないんだ。」の方が誠実に聞こえ、丁寧ではないだろうか。

2－2　『新日本語の基礎』（1990年）

「ここでたばこを吸ってもいいですか。」に、「いいえ、いけません。禁煙ですから。」という例文を挙げ、「ロビーでお酒を飲んでもいいですか。」に

対し、「いいえ、（吸っては）いけません。」の練習をさせており、「ちょっと…」は導入されていない[2]。

同テキストの教師用『日本語の教え方の秘訣』（1998：46）では、「『いけません』『だめです』は禁止の表現で、強い断り方になる。従って、公的に禁止されている場合などは使えるが、私的な理由の場合は、丁寧に断る言い方『すみません＋｛理由｝から。』の表現を使う方がよい。」と解説されている。

また、同書（p.170）では、「～ませんか」と誘われた場合の断り方は、「すみません。今日（は）友だちが来ます」など、何か断る理由を述べる必要があると説明している。

すなわち、同書では公的な場面では強い禁止の「～してはいけません」、私的な場面では「すみません。{理由}から。」がよいと指導し、「ちょっと…」が断りを含意することが全く教えられていない。学習者が実際のコミュニケーション場面で「ちょっと…」と断られたら、それが断りを含意することはニュアンスでほぼ理解できても、その曖昧な言い方に戸惑いを感じ、不快に思うのではないだろうかと憂慮される。

２－３　『Situational Functional Japanese』（以下SFJ）（1991年）

映画への誘いを断る時、親しい友人には、はっきりと「だめなんです。」と言えるが、親しくなければ、「ううん。土曜日はちょっと。」「そうですね…。」「行きたいけど…。」だけで、断っていることは十分に相手に通じるので、「だめなんです」や「行けないんです」まで言う必要はないという説明がされている[3]。しかし、筆者の行ったアンケートでは、留学生の「ちょっと用事があって…ごめん」という断りを、関係を遠ざけられたとし、不快に感じた日本人学生が少なくなかった（マスデン、2011）。

「ちょっと…」の断りは、どのような間柄や場面で言われた時、不快と感じられるのだろうか。飲みに行こうという誘いを「ちょっと…」と断られた時、相手によって不快度はどのように異なるかを日本人学生に尋ねた[4]。その結果、このアンケートでは、親しい友だちに言われるよりも、知り合いに言われたほうが不快だという日本人学生が若干多かった。

知り合いの方が不快だと感じた主な理由は、まだ相手への信頼が不十分なため、用事があるという理由を自分に会いたくないための口実だろうと邪推し、付き合いを避けられたと感じるためだ。「親しければ、断られても自分

のことを避けてるとは思わないが、知り合いだと疑ってしまう。こっちとしては勇気を出して誘ったのに…という気持ちがあり、次回誘うのに抵抗を感じる」というコメントもあった。

また、「親しい相手なら、ぶっきらぼうに反応されても、不快に思わない。気を使われていないんだなと、むしろ嬉しく思う」と、「ちょっと…」で済ませることを、親しい間柄でこそ許される好ましい甘えとして捉える者もいた。

一方、アンケートでは半数に満たなかったが、親しい友だちに言われた方が不快だと答えた日本人学生は、次のような理由をあげている。「親しい人ほど、はっきりと〇〇だから行けないと理由を言ってほしい。」「自分は相手を友だちだと思っていたのに、相手にはそう思われていなかったのかと寂しく感じる。」というように、親しければ、「ちょっと…」ではなく、理由をはっきり言うのが当然だという考え方が窺える。

日本人学生のコメントに共通する興味深い点は、誘いを断られて最も不快に感じる点は、単にいっしょに飲みに行けないということ（目的が果たせなかったこと）ではなく、相手との人間関係が損なわれたと感じたことである。良好な人間関係の構築こそがコミュニケーションの大きな目的なのである。「親しい間柄なら、人間関係が安定しているので、『ちょっと…。』で理由を省略しても支障ない」という考え方がある一方、「親しいからこそ『ちょっと…。』ではなく、理由をはっきり説明してほしい」という相反する主張があることが分かった。また、今回のアンケートでは前者がやや多数派、後者がやや少数派であった。

ところで筆者のアンケート結果は先のSFJの解説に反している。もしも留学生がSFJの説明に従い、まだ知り合い程度の（しかし今後仲良くなりたいと思っている）日本人学生からの誘いを「ちょっと…。」と、理由も代案も言わず曖昧に断ったとしたら、その後の良好な人間関係は望めないのではないだろうか。

同世代の日本人大学生同士ですら二分するほどの価値観の違いがみられるのであるから、日本人全体に当てはまるコミュニケーションのスタイルとして、「日本人には曖昧な断りがよい。」と単純に指導することは危険である。

２－４　『みんなの日本語』（1998年）

外国人スミスさんからのコンサートの誘いを、木村さんが「金曜日ですか。

金曜日はちょっと…。」と断る例をモデル会話で紹介している[5]。それに続く練習問題では、日本語学習者に「〇〇はちょっと…。」の練習はさせず、「すみません。来週の土曜日は 仕事 がありますから。」の「仕事」を「用事」や「約束」に代用させている[6]。

同書の『教え方の手引き』には「ちょっと…。」に関する留意点は特に記されていないが、テキストでは日本人が多用する「ちょっと…。」の意味するところを教えるにとどめ、日本語学習者に「ちょっと…。」の使用練習は不要だと判断したものと考える。筆者は、初級テキストでは「ちょっと…。」の意味は教えるが、あえて口頭練習はさせないという同書の立場に賛成であるが、待遇コミュニケーション教育の立場からもう一歩踏み込んだ説明が望まれる。

２－５　『ようこそ *Yookoso*! An Invitation to Contemporary Japanese』（2001年）

同書３課で「～ましょう／ませんか」の誘いの文型が紹介され、誘いの表現に主眼が置かれている。誘いに対する断りについてはコラム（言語ノート）やロールプレイの指示に、日本でははっきりNoと言うのは失礼にあたり、曖昧な表現（「すみません。またこの次。」「いいですね。でも、また今度。」「どうもありがとうございます。でも、今はちょっと…。」など）を使ったほうがよいと書かれている[7]。

SFJと同様、誘いに対する断りは曖昧な方がよいと教えているが、これはSFJの項で前述したように曖昧な断りは相手を敬遠していると解釈される怖れがある。同書はアメリカなど欧米の大学で使用されることが多く、母語をそのまま翻訳して「いいえ、行きたくありません」のような言い回しにならないようにという配慮から、曖昧な断りを強調したものと推察するが、今日の日本人のコミュニケーション・スタイルは多様であることへの配慮もまた必要ではないか。

２－６　『日本語初級Ⅰ大地』（2008）

６課で、「一緒に昼ごはんをたべませんか。」という誘いに対し、「ええ、いいですか」と、「すみません、ちょっと…。」の表現のみが提示されている。日本語を習い立ての時期に導入しているため、友だちに「ジョギングしませんか」や「お茶を飲みませんか」との誘いを受けて、「すみません、ちょっ

と…。」だけで断る癖が初期段階でついてしまうのではないかと危惧される。

以上、日本語初級の6冊のテキストにおける「ちょっと…。」の導入の仕方を見てきた。これらのテキストは誘いの断り表現として、1）「ちょっと…」を全く教えないもの、反対に2）「ちょっと…」のような曖昧な断り表現のみを教えるもの、そして、3）「ちょっと…」は意味の理解にとどめ、あえて練習はさせないものの3つのパターンに分けられた。

これに対し、筆者は断り表現の導入では、以下の3点に留意するべきだと考える。

①「ちょっと…」に断りの意味があることを教えること。

②「ちょっと…」だけで、明確な理由や代案が述べられないと、相手のことが嫌で断っていると思われる可能性があること。

③明らかに失礼な表現（「〇〇はきらいです。」「行きたくありません。」など）に対する注意を喚起すること。

日本語で失礼のない言い方に注意することは大切であるが、一口に日本人と言ってもコミュニケーションのスタイルや価値観の違いがあり、それ故、「ちょっと…」の解釈も同じではない。「ちょっと…」は時には相手を遠ざける機能があることにも言及し、安易な「ちょっと…」の使用を戒める必要があるだろう。

なお、学習者が適切な待遇コミュニケーションを習得するための効果的な教育方法として、ウォカー泉（2011:34-37）は、説明（明示的学習）を与えつつ、効果的に「気づき」を促すための「しかけ」として問題意識を持ちながら行う「観察タスク」の重要性を指摘している。これを断り表現の指導に応用するならば、授業で日本人のコミュニケーション・スタイルの多様性（曖昧に断るか、はっきりと理由を言うか等）ついて説明した後、実際に日本語母語話者が断りをどのように表現しているのかを観察させ、断りの表現にさまざまなスタイルがあることを気づかせる（意識化させる）ことにより、場面にふさわしい表現の学びを促進することができると考えられる。

3.「思いやりの『ちょっと…』」と「逃げの『ちょっと…』」

ポンフェイ（2006：24）は、「ちょっと」という表現の意味範囲が広く、用法がバラエティに富み、従来の研究では説明しきれないものがあると述べている[(6)]。

日本語テキストが意図した「ちょっと…」の使用は、発話を和らげる意味合いで使うものであり、相手に配慮したものだ。いわば、「思いやりの『ちょっと…』」と言えるだろう。寿司に誘われて、「寿司は好きじゃありません」や「食べたくありません」よりも、「寿司はちょっと…」と言い切らない方が、誘ってくれた相手にやさしい。つまり、寿司が好きな相手に配慮して、「好きじゃない」や「食べたくない」を敢えて言わない「思いやりの『ちょっと…』」なのだ。

しかし現実には、言いにくいことを避ける「逃げの『ちょっと…』」という用法もある。前述のアンケートに回答した日本人学生が「ちょっと…」の断りを不快だと感じる一因は、この「逃げの『ちょっと…』」も作用しているのではないか。誘いを「ちょっと…」と断られた時、相当親しい間柄でもなければ、「用事って何（ですか）？」と尋ねたり、「じゃ、他の日はどう（ですか）？」と交渉する道は閉ざされてしまう。つまり、「ちょっと…」と断られた側は、諦めるより他に「仕方が無い」のだ。断る側には使い勝手のよい言葉だが、断られる側には言われっぱなしに甘んじるしかない。

なぜ本当の理由を言わないで逃げるのか、あるいは控えめに言うのだろうか。その問いの答を、アメリカに暮らす小説家の片岡義男（2003: 400）は『日本語の外へ』の中で、その方が話し手に害が及ぶのを防御できるからだとし、次のように述べている。

> 日本語のはっきりした特徴の一つである控えめな表現というものについて、さきに少しだけ僕は触れた。なぜ控えめにするのかは、母国語とそれによって作られた文化の命令するところであり、控えめな表現のための方法や言葉は無限に近く日本語のなかにある。控えめにものを言うことの効果は、控えめにしておけばそれだけ害や災いが自分の身におよぶ危険が少なくなる、ということだ。

さらに片岡（2003: 406）は、曖昧な逃げの表現を、こう指摘する。

> そして問題の曖昧なとらえかたとは、因果関係を明確には解明しないでおくことだ。ひとつの状況や問題に対して、どの方向からどのような力が加わり、その結果としてその方向へどんな影響がもたらされたかをはっきりさせずにおくと、すべての事態や問題はいつのまにかそうなっ

たこととして、誰の責任でもなく、あるとき全員の目の前に姿を現すことになる。

　そうなった。あるいは、そうなっている。事態や問題のこのようなとらえかたは、日本語という母国語の文化の命じるところだ。

問題を明確に解明せず曖昧にとらえる傾向は、社会問題にも及んでいるのかもしれない。そこまで深刻な隠蔽ではないものの、日常会話のレベルで、言いにくいことを曖昧にぼかすことは決して珍しいことではない。その戦術に用いられるのが、「ちょっと…」のように言い切らない表現ではないだろうか。話し手は自分の意思を曖昧に相手に伝えることで、自分の発話責任を逃れつつ、自分の意思を相手に確実に伝えることができる。こうした責任回避の表現について、水谷静夫（2011: 84）は待遇表現や敬語の使い方が変になっていること関連づけ、次のように述べる。

　現在のいわゆる敬語がおかしいのは、すべて責任回避から発しているということです。敬意からは発しておりません。それから、私が先ほど強調したような待遇のわきまえからも発しておりません。自分に対して損が及ばないように、自分が責任を問われることがないようにという一点張りで来ているわけです。そういう習慣で格表示を「とか」でいつも逃げ、それをどういう格に取るかは聞き手任せにするとなりますと、格助詞を使っておかしな表現が起こってきます。

つまり、曖昧に表現することにより、話し手は発話の責任を回避することができるわけだ。この話し手の責任回避という観点について、滝浦（2006: 79）は、“一緒にビールを飲んでから帰りたい”という意図を、話し手が「ああ、腹減ったな…。」とほのめかし的に言った場合、S（話し手）よりもH（聞き手）に負荷がかかることについて、次のように説明している。

　Sが非明示的にほのめかしをする場合、Sは自分の意図を隠したままである。SはHのフェイスを侵害しない代わりに、自身のフェイス・リスクも払わないため、負荷はSの意図を読んで応答を返すHの側にかかる。つまり、Sの利得とHの利得に差が出る。ここから、「ほのめかし」には、自分の意図の表明を“一手送らせる”ことによって、意思決定を

相手に転訛する働きのあることがわかる。

日本人学生が「ちょっと…。」という断りに感じた不快感は、親疎の観点からだけではなく、（アンケートのコメントとして表現はされなかったものの、）話し手が自分の発話責任をとりきらないという態度にも起因するのではないかと考える。滝浦の上記の説明を借用すれば、筆者のアンケートで留学生の「ちょっと…。用事があって、ごめん」という曖昧な断りは、話し手（留学生）にフェイス・リスクはなく、聞き手（日本人学生）ばかりに解釈の負荷がのしかかるわけだ。相手に悪く思われないように、自分を取り繕う意味合いで理由を省略したり曖昧にぼかすことは、話し手にとっては気楽であるが、聞き手には解釈の負荷がかかるため、決して親切な言い方とはなるまい。「ちょっと…」はソフトな語感があり丁寧そうだが、聞き手には親切な表現とは限らない場合がある。

4. おわりに

本稿では、曖昧な断りの「ちょっと…」は聞き手に丁寧であるか、という問いをめぐって、明確に言わないで解釈を聞き手にゆだねる手法の是非について考察した。

「ちょっと…。」という表現は語気を和らげ、断り表現の潤滑油として重宝されるが、一方で相手を敬遠したり、言いにくいことをぼかす働きもある。外国人だけでなく実は日本人でも不快と感じるのは、こうした敬遠の意図の「ちょっと…」や発話責任を回避する「ちょっと…」であろう。「ちょっと…」の安易な使用は、対人関係の悪化を招く怖れがあるため、日本語学習者に教える際は、注意が必要である。

「ちょっと…」を使いたくなる場面で、それは「ちょっと…」でぼかした方がよい「思いやりの『ちょと…』」なのか、あるいは話し手の発話責任を回避する「逃げの『ちょと…』」なのかを区別し、後者については、発話の責任の所在を明らかにする話し方をすることにより、相手との対話の道が拓かれていくのではないかと考える。今後、多文化共生社会となりつつある日本で、発話の責任をとる話し方がますます重要になっていくのではないか。

注

(1) “BASIC FUNCTIONAL JAPANESE”（Lesson 20. p.p.270-271）より

Troublesome factor *wa chotto...*

“ _____ is a little bit（troublesome）...”

A : *Ashita san-ji ni kite kuremasenka.*

B : *San-ji wa* *chotto....*

-Not giving permission（前掲書Lesson 23. P317から）

A : *Tabako o suttee mo ii desu ka.* “Do you mind if I smoke?”

B : *Chotto...* “Well, I do.” [Lit. It’s a bit...]

A : *A, domo sumimasen.* “Oh, I’m sorry.”

B : *Iie, kochira koso.* “I’m sorry, too.”

(2)『新日本語の基礎』第15課　p.120

文型　1.　たばこを吸ってもいいです。

例文　3.　ここでたばこを吸ってもいいですか。

…いいえ、いけません。禁煙ですから。

(3)『Situational Functional Japanese』 Volume 3: Notes 第17課では、誘いに対する曖昧な断り方（①～③）について、次の会話例が示され、以下の説明がなされている。

A : 今度の土曜、映画に行きませんか。

B : 今度の土曜日ですか。

A : キネカで「レインマン」やってるんですよ。

B : ①ううん。土曜日はちょっと。

②そうですね…。

③行きたいけど…。

「土曜は、ちょっと」“Saturday is a bit…” implies that Saturday is inconvenient. Expressions like ちょっと or そうですね are sufficient to make the listener aware that the offer/invitation cannot be accepted, and 「いいえ。だめなんです。」or 「いいえ。行けないんです。」are therefore usually omitted. To a close friend, however, you can say directly 「いいえ、土曜はだめなんです。」

(4) 筆者が2011年前期に担当した教養科目（異文化間コミュニケーションと日本語）を受講した日本人学生（43名）に、「ちょっと…」の断りに関するアンケート会話を行った。日本語テキストの会話例（『Situational Functional Japanese』 7 課の会話例より）を読ませ、「ちょっと…」を使った断り方をどう感じるかを、知り合いに言われた場合と親しい友だちから言われた場合で比較した。その結果（一部）を以下に記す。

問い：あなたは以下の会話のAさんだったとしたら、Bさんの断り方をどう感じますか。Bさんが知り合いの場合、親しい友だちの場合に分けて答えてください。

A：今度の土曜、コンサート行かない。
B：うん、土曜はちょっと…。
A：だめ？
B：今度の土曜日は、保証人のお宅に行くことになってるから。
A：そう。じゃ、日曜日は、どう。
B：　日曜も、ちょっと…。
A：残念だな。じゃ、またいつか。
B：ええ、ごめんなさいね。

結果

	【知り合い】	【親しい友だち】
とても不快だ	2名　（ 5%）	6名（14%）
やや不快	25名（58%）	12名（28%）
あまり不快じゃない	14名（33%）	18名（42%）
全く不快じゃない	2名（ 5%）	6名（14%）

(5)『みんなの日本語』（初級I本冊9課　会話（残念です）p.73）　モデル会話

ミラー：もしもし、ミラーです。
木村　：ああ、ミラーさん、こんばんは。お元気ですか。
ミラー：ええ、元気です。あのう、木村さん、小沢征爾のコンサート、いっしょにいかがですか。
木村　：いいですね。いつですか。
ミラー：来週の金曜日の晩です。
木村　：金曜日ですか。金曜日はちょっと…。
ミラー：だめですか。
木村　：ええ、友だちと約束がありますから…。
ミラー：そうですか。残念ですね。
木村　：ええ。また今度お願いします。

(6) 断りの会話の練習問題（前掲書p.77から）

A：コンサートのチケットをもらいました。いっしょに行きませんか。
B：いつですか。
A：来週の土曜日です。
B：すみません。来週の土曜日は［仕事］がありますから。
A：そうですか。残念ですね。
※ 上記の［仕事］を、［用事、約束］に入れ替え練習をする。

(7)『ようこそ』Chapter 3 232－233ページより

・「言語ノート」（232ページより）：
To decline, say
・すみません。またこの次。I'm sorry, but（let's do it）next time.
・いいですね。でも、また今度。That would be nice, but（let(s make it）next time.
・どうもありがとうございます。でも、今はちょっと…。Thank you vey much. But I am afraid now it a bit ...（inconvenient）.

・ロールプレイの指示（234ページより　下線は筆者）：
Invite a classmate to have lunch with you next Monday. Suggest eating at our favorite restaurant near the university. If your classmate is busy next Monday, ask when he or she is free. Remember it is rude to say no directly in Japanese; if you are busy next Monday use of the responses you learned in the previous Language Notes.

(8) ポンフェイ（2006：26-32）は、「ちょっと」のさまざまな用例として、次のようなものを挙げている。「あの人はちょっと」はマイナス評価で、「ちょっとねぇ」や「ちょとなぁ」となると、全面否定の意味に近くなる。「ちょっとお先に」や「ちょっと失礼」では、「ちょっと」を添えることによって、お詫びの気持ちを持たせられる。「ちょっと１ヶ月ヨーロッパに行ってきた」では、話し手の行為を誇張しない効果がある。「ちょっとお茶でも」のように話し手が相手に依頼要求をする場合、この「ちょっと」を使わないと唐突で、相手になにかを要求する意思がむき出しの印象を与える。「お値段もちょっとしたもの」の「ちょっと」は、話し手自身の判断を和らげ、場合によっては「相当」の意味を持っている。このように「ちょっと」には多様な意味がある。

参考文献

ウォーカー泉（2011）『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育　－スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に－』、スリーエーネットワーク
片岡義男（2003）『日本語の外へ』角川文庫（初版は1997年に筑摩書房から）
蒲谷宏（2011）「待遇コミュニケーション教育から見た日本語能力の育成」『早稲田日本語教育学』第９号（早稲田大学大学院日本語教育研究科）
滝浦真人（2006）「単位で捉えられるもの、捉えられないもの　－『ほのめかし』とポライトネス」『言語』Vol.35 No.10 74-81
ポンフェイ（2006）『日本人と中国人のコミュニケーション』和泉書院
マスデン眞理子（2006）「日本語学習者が対人配慮スキルを学ぶことの意義」『熊本大学留学生センター紀要』第10号（熊本大学留学生センター）
マスデン眞理子（2010）「外国人の失礼な日本語表現について　－待遇表現の間違いと

見えにくい用例－」『熊本大学国際化推進センター紀要』第１号（熊本大学国際化推進センター）
マスデン眞理子(2011)「日本人大学生が失礼だと感じる留学生の誘い・断りの表現に関する予備調査」『熊本大学国際化推進センター紀要』第２号（熊本大学国際化推進センター）
水谷静夫(2011)『曲がり角の日本語』岩波新書

参考にした初級日本語教科書、および手引書

『新日本語の基礎Ⅰ本冊』(1990)海外技術者研修協会、スリーエーネットワーク
『日本語の教え方の秘訣　下－「新日本語の基礎本冊」の詳しい教案と教授法』(1994)、有馬俊子、スリーエーネットワーク
『日本語初級Ⅰ大地』(2008)山崎佳子、石井玲子、佐々木薫、高橋美和子、町田圭子(著)、スリーエーネットワーク
『Situational Functional Japanese』(1991)筑波ラングエージグループ、凡人社
『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』(1998)、スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』(2001)、スリーエーネットワーク
『Basic Functional Japanese』(1987),The Japan Times
『ようこそYookoso! An Invitation to Contemporary Japanese』(2001) Yasu-Hiko Tohsaku, McGraw Hill